

『とうきょうの社会科』1965年1月（東京書籍）

学習過程の近代化

矢口 新

わかるということ

学習過程を、わかることの過程だとする考え方は、日本ではなかなか根強いものをもっている。裏から言えば教授、ないし学習指導の過程はわからせる過程だとする考え方である。授業の間に「わかったか、わかったらおぼえておきなさい」という言い方はふんだんに出て来る。そういう考え方をどうして逃れることができるかを考えることは学習過程の近代化への第一歩ではなかろうか。

講義にしても、問答にしても、話し合いにしても、あるいは教科書を読む場合でも、わかったと思うことぐらい、たよりないものはない。その時わかったと思っても、あとで考えると、よくわからないことの方が多い。つまり一度や二度人の話を聞いても、本をよんでも、あまり力とはならないということである。わかったと思うのはやはりそう思うだけで、本当にその話のように自分が考えられる。その本のように自分で考えられるということにはなっていないのである。つまり自分の頭がそうでき上がっていないのである。それでは、その人間が育っていることにならない。育って行く——つまり頭がのびて行く入口の所で、なすべきことをやめてしまっているのである。わかったと思うことは、成長のいとぐちであろうが、それで、あとはおぼえておきなさいでやめにするのでは、門の入口で引返してしまうようなものである。だからあの時わかったと思ったが、あとで一人で考えようとすると、考えが走らないのである。もとのもくあみとなっているのである。

こうして授業は、いつも門の入口の所で引きかえしている。中途半端なことをやっているから、子供に力はつかないのである。

おぼえるということ

おぼえておけということを教師はよく言うが、これ

に教師はどれだけ責任をもっているのであろうか。子供の方もそういわれるとすぐ「ハイ」と答えるが、果してどれだけの責任をもっているか。言われるときは、おぼえておく積りであろうが、いくらそのつもりになっても、それだけでおぼえておられるものではなかろう。問題はどうしたらおぼえられるかである。

例えば先生の話をおぼえているというのは、先生がいなくても、自分一人でその筋がたどれるということであろう。一度話を聞いて、すぐもうあとでたどれるというのはよほどの天才であろう。まず普通にはないことである。普通には、何回もくりかえし、たどってみて、やっと一人で筋がたどれるようになる。つまり練習、くりかえしということである。そして自分で考えることができるようになるということである。それがおぼえたということである。そしてそれが、自分ができるようになったということである。それが成長である。

こう考えると、学習の過程で一番大切なことは、何かということとはもう明らかになったわけである。それは児童らがやってみるとのこと、考えてみるということ、それをくりかえすということである。

学習指導はわからせるということではなく、自分でわかる過程をたどる、それをくりかえすということである。そこでおぼえられることは、考え方である。俗に考え方が身につくなどというのはそれである。

ここでもう一つ大切なことをあげておくと、先生のいったこと、本に書いてあることをただ暗記するのは、考え方が身につくことにならない。おぼえると暗記するの区別をはっきりしておく必要がある。第一社会科の内容を暗記しておいても、それは十年たてばうそになる。時代おくれになる。

（国立教育研究所所員）